

# IV さまざま な視座

一 とても面白い本——『嵐を生きた中国知識人』

この分厚い日本語訳の本をやっと読み終えて、ホッとするとともに、感動を覚えた。私のいつもの持つて回った言い方をすれば、「見てきたような虚が書かれている」本なのである。

章詒和著、横澤泰夫訳『嵐を生きた中国知識人——「右派」章伯鈞をめぐる人びと』（集広舎発行、中国書店発売、二〇〇七年十月二五日、四一二ページ、三九九〇円）

見てきたようなというのは、あたかも作者がその場を見てきて、読者にその場面にいるような臨場感を持たせるからだ。読者である私は何度も作者の筆の力によって、その場面に立ち会っているような気がした。父娘の会話の場面や、母娘の会話の場面に、そして章羅同盟と言われた、章伯鈞と羅隆基の喧嘩の場面に立ち会っているかのような感じだ。つまり、立ち会っているはずがないのに立ち会っているかのような虚によって、読者はその場面の真実を味わえるのである。これは『史記』の司馬遷の筆法と同じである。あの鴻門の会を思い出してくれば、私の言うことがわかってくれるであろう。このリアリティは、また作者・章詒和のずば抜けた記憶力にもよっている。

彼女は言う

「記憶について言えば、こんなことが言えるくらいだ。つまり一九五七年以後の私は、同窓の友との友情もな

く、社会的な交際もなく、精神的な楽しみもなく、異性との愛情の日々もなかった。それ以後は、孤立させられ、拘束され、叩かれ、刑罰を下され、父を喪い、母を喪い、夫を喪い……数十年間、私はただ心に向かつて生活を探し求めた。心の生活とは何か。それは回想である、ただ回想があるだけだった」と。

この言葉は、彼女の悲痛な人生の一端を語っている。彼女は大「右派」の娘として、四川に配属され、そこで「現行反革命」の罪で二十年の刑罰を受けた。十年間で実際は出てきて北京に戻ったのであるが、父・章伯鈞は、五七年に右派とされたままいまだに名誉回復されていない。

彼女の獄中での怨念を伴ったこの書物は、したがって、五七年当時の右派の人物の実像を見てきたように描くのである。彼女の記憶とそれを載せた筆にしたがって、我々は当時の実際の家庭や批判会を見るようなことになる。そして、人が追い詰められた時にどのような態度に出て、自分の危機を恥も外聞もなく脱するかが窺える。

でも、これは彼女の意図したものではない。裏切ることの必然性をもたらせる党の存在を浮き上がらせるのが彼女の願いである。もちろん、この党は中国共産党を指しているが、彼らが所属した民主党派の一つ民主同盟だとて、立派な対応をしたわけではないことが明白に示される。

こういう点でも、私には新しいことを知らされて、とても面白かったのである。章羅同盟と言われた極悪人が、章伯鈞に至っては、家はそのまま、お抱えコックや護衛官までつき、車（ビュック）まであてがわれていたことに正直びっくりした。なんと良い待遇なのであろうか！ こう見えるのは実はことの表面しか見えない凡人である私の僻みなのであるが、確かにその後の孤立無援の社会的生活の苦しきは十分に理解するにしても、同じ大右派の羅隆基は、四級から九級に引き下げられたので、金に苦しむ生活を強いられたことを合わせ考えると、やはり良い生

活をしていたのであるなあと思わざるを得ない。

その章羅同盟が、同盟どころか、喧嘩ばかりしていた間柄で、民主同盟の中で指導権を争う敵同士であったということも、新しい事実として私には面白かった。

この大部な本の中には、たくさん面白い事実が詰っている。例えば、最後の貴族・康同壁とその娘・羅儀風のこと、狷介固陋な聶紺弩の悲劇など実に興味深い。

しかしそれにしても、章詒和の描く、「右派」分子は、なべて外国帰りの知識分子である。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどに留学し修士や博士の学位を持って帰国した知識分子である。私の偏見によれば、こういうハイカラなバタ臭い輩は、なんとなく虫唾が走るものを撒き散らし、魯迅の言うニセ毛唐のような、うっかり傍にいると鼻持ちならぬ奴なのである。おまけに彼らは優秀で目から鼻に抜ける才を持ち、人を小ばかにする。こういう知識人を中国の田舎親父が、尊敬し対等に扱うわけがない。自分の支配下において言うことを聞かせようとしたのだと私には思えた。彼ら右派分子は、自分たちの善良さと才気によって国に奉し、国に尽くそうとしたのだろうが、田舎親父にすれば、善良な考えなどは必要なく、ただ奴婢の如く仕事をし、自分に従えばよかったのだと思う。こういう感想を最後に持たせる本であった。

私は今原本を注文している。ぜひとも原文で読みたいところがあるからである。訳者はかなりこなれた訳文にして読みやすい。原注と訳注が詳しく、それだけでも大変役に立つ。惜しむらくは少し誤植が多いことであろうか。いずれにせよ、面白い役に立つ良い本を読んだ。

## 二 待望久しい本——『中国低層訪談録』

劉燕子さんから本を頂いた。これは『TianLiang』に掲載されたものの原著の翻訳である。

廖亦武著、竹内実日本語版監修、劉燕子訳『中国低層訪談録（インタビュー）どん底の世界』（集広舎発行、中国書店発売、二〇〇八年五月一〇日、四〇四頁、四六〇〇+α円）

二〇〇六年十一月一日発行の『TianLiang』九八号に「老紅衛兵 劉衛東」が掲載されてより、五回にわたって紹介された廖亦武の原著が、とうとう訳出されてわれわれの眼前に置かれることになった。（その後『天涼』第一〇巻に所収）。

原著は、内容の衝撃的な事柄により発禁の書にされたが、なぜ発禁にされたかが十分納得がいくほど衝撃的な内容である。ここには触れてはいけない日常の裏の面が暴き出されているのである。人にも国にも組織というものにも必ずある恥部の面が曝されている。こういう恥部をどれだけ曝し、それを救済していくかがその人や国の度量となるのであろうが、われわれはまず、そのような綺麗事で済ますことのできない事実を驚嘆し、声を呑む。

録音もメモもせずに、渾身のエネルギーで人々の本音を聞き出したとされる本書が突きつける問題は、ひとり中国だけに終わらぬものを持つてあろう。わが身、わが日本においてはどうかであろうか？

事実はいつも重みを持っているが、その重みをわが身に引き受けるときに初めて活き活きとした生の重みとなる。まず、その重みを直視しよう。旺吉の「チベット巡礼者」などは、実にタイムリーで、根の深いところからの理解を要求するであろう。

本書の持つ重みと意義については、劉燕子さんが力を込めて論じているから、それに譲ろう。そして、「謙虚」にならないといけないと静かに語る竹内先生の「序」にも、耳を傾けよう。

写真で見る廖亦武氏の敞しい面構えに、私は美しさを感じた。

### 三 岡田祥子編訳『新中国を生きた作家 蕭乾』

近頃、突然『新中国を生きた作家 蕭乾』を頂いた。岡田祥子訳・編、幻冬舎ルネッサンス、二〇〇九年四月一日、三九九頁、の本である。

蕭乾という名前は今でもなじみが少ないであろう。なぜなら、彼は一九五七年に「右派」にされてから、二十二年間、文革が終わって名譽回復されるまで作品を発表できなかったからである。蕭乾は貧しい家に生まれながら、刻苦勉励して燕京大学を卒業してイギリスに留学した。『大公報』の特派員としてアメリカでの国際連合創立のレポートをいち早く中国に報じて有名になった。日本では、丸山昇・江上幸子・平石淑子共訳『地図を持たない旅人——ある中国知識人の選択』上下（花伝社、一九九二、九三年）という訳本があつて、少し名前が知られるようになった。

『新中国を生きた作家 蕭乾』というのは、蕭乾の奥さんである文潔若さんの『我和蕭乾』が元の本である。訳者の岡田さんと文潔若さんとは、親しい仲で翻訳の話を取り付けたそうだが、急に話が行き違い、二人の仲が悪くなり、訳本出版ができなくなつたらしい。詳しいことは書かれていないが、「しかし原作者のハードルが高く、すべて話し合ひは徒労に終わりました。」とだけ書かれている。そして、「そんな事情から、迷い、考えあぐねた末、

私家版での出版を選択しました」そうだ。

私にとっては、二人とも顔は知っているが、どんな事情が二人の間にあつたかよりも、書かれている事柄に興味があつた。というのも、蕭乾と冰心とは仲が良いと言うか、同じ時代を生きて、苦しみを舐めた者同士の間柄であつたからである。それはまた、蕭乾と巴金、蕭乾と沈從文などとの関係も想像できる間柄なのでもある。冰心（一九〇〇〜一九九）、巴金（一九〇四〜二〇〇五）、沈從文（一九〇二〜八八）、そして、蕭乾（一九一〇〜九九）と並べてみると、彼らが同じ世代で、同じ仲間（グループ）を作っていたことがわかる。意図して、何かを目的とした党派を作っていたわけではない。そうではなくて同じ文学を愛好するもの同士の交流があつたのである。手紙のやり取りや家への訪問などが各自の間に行なわれた。たとえば、蕭乾と文潔若が結婚した時には、「巴金は私たちを含め、何人かを沙灘にあるレストランに連れて行ってくれた」（一一六頁）そうだ。

だが、中国における政治キャンペーンの実態は、人間性を踏みにじりいびつにするものであつた。この本から感じ取れることは、如何に親しい間柄でも信用ができない人と人との関係ということである。たとえば、今引用した巴金の接待のすぐあとに、こうある。「食後、同席した葉君健が私たちを北海後門の彼の家に連れていき、コーヒーをご馳走してくれた。私たちは夜更けまで話し込んだ」（一一六頁）。でも、この児童文学者の葉君健は、あるイギリス人から蕭乾に渡してくれと頼まれて預かつていた「猫の写真」を受け取つてすぐ蕭乾に渡さなかつたそうである。そして、反右派闘争の時期になると、葉君健は一九五〇年に預かつてその「猫の写真」を取り出して、蕭乾がイギリスの文芸界に紛れ込んだ証拠の写真だと話をでつち上げて彼を告発したそうだ（一一五頁）。

事実はどうであつたのかわからないが、「猫の写真」などというトリビュアルなことを以つて人の非難の材料にし、話をでつち上げるといふそういう状況を私は痛ましいと思う。人を非難しなければならないという状況を、で



ある。その時、こういうつまらぬことを動かぬ証拠のように言う喜劇だか悲劇の滑稽さが如何にバカバカしく現実離れしているか、冷静になればわかることであろう。みんな嘘を言っているのだ。そういう嘘をもとに、人を何年も虐げるといふ状況を、私は恐ろしく思う。蕭乾の場合は二十二年間もだ。文潔若さんは葉君健が七年前に写真を預かっておきながら、告発の場に持ち出して蕭乾を非難したと彼の非人間的なことを責めている。私も賛成するが、葉君健の方から考えれば、本当にそうであったのだろうか？ 葉君健の話に会場が笑いに包まれた、と文さんも書いてるように、すべての人が葉の話を実実として聞いていたとは限らないように私には思える。責めるべきは、葉君健個人であるとは限るまい。

それにしても、こういう状況は、誰も信じられないという状況を重ね、深める。人間性を酷薄なものにすると思う。そして自分の保守と防衛をいつも考え、他者のその時その時の思考や動揺などを考慮する余裕をなくするような気がする。いつも監視されているという感覚で生きねばならないのではなからうか。この点、日本人がいつも「甘い」と思われ、そう言われるのもこういうところに原因があるような気がする。

もう一つ、この本から次の言葉を頂いた。それは、蕭乾たちが、住んでいた家を追い出され、見も知らないよそ者が入り込んでくる、文革の初期のことである。

「私の姉は最初追い立てられて、付近の梁家大院胡同の北屋に引っ越した。その部屋の隣の二間に越してきた女が大声で、大工の亭主に、『やっぱり文化大革命つていいやね。でなかつたら、あたいたちはこんな日当たりのいい瓦屋根の大きな家なんかに一生活めっこないもんね』と言った」(二七八頁)。

文革は素晴らしい、面白い、益があるとした人々は結構多かったのである。だからこそ文革は十年も続いたのである。革命はお茶を出して人を接待するようなものではないと、言われてはいるが、現実の衣食住にまで革命の影

響が及んでくると、私などはオタオタしてしまう。それは、生活をしているときには往々にして別の階層とか別の階級などを忘れていいるからであろう。能天気な私の頂門に一針の言葉である。

#### 四 木山英雄著 『人は歌い人は哭く大旗の前——漢詩の毛沢東時代』

（岩波書店、二〇〇五年八月三日、三〇九十七頁、三四〇〇＋α円）

著者・木山英雄先生は、「旧体詩詞に關してもまた現代政治史に關しても、専門的な研究をしたことのない私が」とおっしゃる（二八五頁）。それは確かにそうかもしれないが、「旧体詩詞に關してもまた現代政治史に關しても」専門的な研究者以上の洞察と熟練があることは、現代文学に携わる者であるならば、誰でも知つていよう。その著者の十年にもわたる労作を、「旧体詩詞に關してもまた現代政治史に關しても」ロクに知識のない私が、書評をするのは「失察」（二七九頁）というものであろう。この本は著者の苦心と矜持とが積み込まれた労作である。だから、一筋縄ではいかない。

先ず、題名を見たときから、これはなんだ？と訝しげな気分であつた。副題と逆ならば、まだ通りがよいのかもしれない。『漢詩の毛沢東時代——人は歌い人は哭く大旗の前』。あるいは、『毛沢東時代の漢詩』ならば。

事実はそうではない。このような平凡な題名で律しきれぬ中国現代史ではないとする著者の勢いがここに表れているのである。ここに著者の矜持がある。だが、それにしても、題名にある、いきなりの感情表出には辟易するところがある。確かに、現代における旧体詩詞をこの本は扱うのであるから、それだけでも、訝しい。五四時期以来

の新詩を扱うのではない。旧体の「詩」であり、「詞」なのだ。したがって、作ることは勿論、読むためにだつて規則が必要だ。平仄だの押韻だのといった初歩的なルールが必要だ。そう、対句も、次韻の何たるかという知識も、打油詩の意義なども必要だ。こういうものが、多くの人に訝しさを感ぜさせるであろうし、術学的な世界を想像させる。著者の言う「狭い専門的世界に閉じこもる傾向」（二八九頁）である。言うまでもなく、著者はこれらのテクニクを懇切丁寧に指し示し、より普遍へと読者をいざなう。親切な本であると言えるが、読者が、それについていけるか、そういう世界に入つていけるか、これは神のみぞ知るといふほかない。例えば、「怕写一行詩」を「一行の詩 書くもしんどし」（六六頁）と読んだり、「算従来 詞賦工何味」を「そも従来 詞賦工（たくみ）なればとて何の味（かい）かある」（二三七頁）と読む、この妙味に感じ入るならば、とても面白いレトリックの世界がこの旧体詩詞に開け、その妙なる技巧の世界に魅了させられるに違いない。著者の苦心を知れば知るほど、この本は面白くて有益な本となる。

この旧体詩詞の世界は、五四時期に打倒され、否定されたはずであつた。しかし、このような旧体詩詞でなければ、自らの気持ちを表現できない時期があつたのだ。この矛盾した、現代史上の事実を著者は注視し、考察する。事實は人の事跡として詠歌され、残される。したがって、ここで扱われる人は、たかだか十人そこそこであるが、その職業はさまざまであり、十分に現代政治史を語るにふさわしい面々である。人名を挙げよう。楊憲益、黄苗子、荒蕪、啓功、鄭超麟、李銳、揚帆、潘漢年、毛沢東、柳亜子、胡風、聶紺弩、沈祖棻、舒蕪、といった人々である。この本の十二章ほどの文章に出てくる人それぞれが、読めば読むほど神秘的な事跡に満ちる。そういう魅力ある世界が旧体詩詞の解説をする著者によつて開かれる。そして、ここに挙げた人と著者とは多くの場合通り一遍の間柄ではない。例えば黄苗子の律詩「偶成」の「魂滯落湯鷄」を解して、「現代語の『湯』が普通にはまずスープであ

ることを思うと、酒は一滴も飲めぬが広東人らしい食道楽で、通風の苦しみや、近くは宴席の崇りで吐血したことでまで詩にしている人の自嘲として、さらに滑稽はつもの」(三三頁)という。著者と詩の作者との距離が並大抵ではないことを示す例となろう。他の人について、いちいち詳しく紹介するスペースがないことが残念だ。

ここに挙げた人々は、それほどポピュラーな人ではない。例えば、楊憲益などは、外文出版社に勤めており、中国古典の英語訳を数多く出版した。また『Chinese Literature』誌の編集者でもあったので、奥さんの戴乃迭とともに、中国文学を世界に紹介し、広めるという点では、欠くことのできない存在であった。多くの中国古典の翻訳という仕事からも、中国の古典に如何に造詣深いか、そして、旧体詩詞に造詣深いかが推測できる。しかし、翻訳者という位置からして、一般に名の知れた有名な人物ではない。この本では、毛沢東を別格として、あとの人々は、有名度において二線三線に据えられる人々である。だからこそ、「大旗の前」に「歌い」「哭く」のである。だが、これらの人々は実務家として現代史の内実を荷っていたのである。

この本が力を込め、著者の熱情有らしたものは、胡風問題である。一九五五年に胡風が批判され、反革命者とされた事件と、その際に証拠として差し出された私信の保持者・舒蕪のことは冤罪として我々の脳裏にある。その解明に著者は集中する。それは、著者が聶紺弩の旧体詩詞を手に入れたことから始まる。聶紺弩と胡風の詩詞の応酬に見られる、葛藤と執念とを通じての情愛は、普通の友情とか愛憎を越えた壮絶な命の結晶である。互いの存在を認め合う、昇華した友情の契りに至る著者の読み込みは、この本の圧巻といつてよいであろう。その交流が旧体詩詞を通じて行なわれたのである。あるいは、旧体詩詞だからこそ互いの心が通じ合えたのであると言えるかもしれない。聶紺弩は決して胡風の意見に全面的に賛成したわけではなく、それどころか文革の進展を見て、胡風にこれまでの手紙と詩詞とを焼却するようにという要求までした。「極端な逆境を越えて互いの友誼が生き残ったことは

いかにもめでたい次第であつたが、究極のところは、両人がそれぞれの仕方それぞれのぎりぎりの真実を守ろうとしていたことに、互いに尊敬を維持しえたればこそそのことであろう」（二八〇頁）と著者は言う。それは、聶紺弩と舒蕪との関係においても、同じである。「舒蕪は旧詩に厳しい聶が彼の詩に対しても、もう作る気もなくなるほどの酷評を加えるのが常だつた」（二七二頁）と言う。そして著者は、「では聶はどんな作り方をするのかというと、たとえば彼にも獄中から変わりはたてた姿で出てきて、一粒種の娘が自殺していた事実を知らねばならなかつた経験があり」（二七三頁）と指摘する。この地獄絵のような中国現代政治史の中で、凄まじいまでの詩に関する論議は、旧体詩詞であつたればこそ出来た仕業であつた。

ここに、著者に一貫してある旧体詩詞の文学史的意義への関心の根源がある。著者は言う。「われわれの経験の外にある長期かつ全面的な革命の歴史と、その勝利に続く建国事業の圧倒的な政治性の前に、公的な詩文学の主流の地位だけは確保した新詩がほとんどジャンルとして自律を失つたのに対し、それなら素養という半ば私的な領域に伝統をつないできた格好の旧詩にはどの程度なすところがあつたのかと考えるのに、純粋文学の理念で政治を撥無はくわするのは見当が違ふし、試練としての事件というものも見逃せない。近代の短歌や俳句が病中吟の生命凝視に日本的な極致を示したのに比べ、中国では獄中吟が別の極致を示しているかどうか、結論を急ぐほど多くの実作には当たつてはいないが、この対比にも意味はあるだろう」（二四二頁）と。

さらに、著者の目の信頼に値するのは、毛沢東の「沁園春・雪」をめぐつての現代史における旧体詩詞の位置の解明である。一九四五年八月に延安から重慶に出た毛沢東はこの詞を、「詩のそういつた微妙な政治的作用」（二八六頁）を「まるで正確に計つたかのように」（一八五頁）タイムリーに公開して、勝ち点を拾つたことの指摘である。「この一首の詞が毛沢東という新たな伝説の主を世に知らしめる」（一八六頁）ことになつた劇的な経験が、その後

の毛沢東の旧詩の位置づけを決定し、それに唱和する文学者たちの位置をも決定したのである。「冤罪劇のほとんどは、多かれ少なかれ毛を頂点とする大きな力と主人公との一体的共演としか見えぬふしがあるからである」（一六九頁）と著者は言う。中国現代政治史と旧体詩詞の頂点に毛沢東は立ったのである。以後の文学者たちの「詩と境涯」（二七〇頁）は、「監獄が『詩の温床』になった」（一四一頁）のである。もっとも、「詩と牢獄の腐れ縁めいた関係には由来久しいものがあり、清末以来ずっと百年の政治案件に限って、いったいどれだけの獄中詩を培養してきたことだろうかと考えてみるだけでも、気が遠くなる」（一四一頁）のであるが、なかでもここに取りあげる詩人たちは、「特定個人の特定の言動に関する告発を一切拒み通したのは、自身の苦い経験に裏付けられた厳しい倫理というものだった」（二一四頁）と言われる胡風をはじめ、ひと癖もふた癖もある人物であった。例えば、トロッキストで、「反革命」の罪状のまま二七年の間獄中にあつて、一九九八年八月に九八歳で世を去った鄭超麟などが扱われる（九三頁より）。

毛沢東に関しては、廬山会議のことなど、この本で触れている事柄は多いし、紅一点の沈祖棻などにも触れるべきかもしれないが、最後に一つだけ追加しよう。旧体詩詞は、例えば「原詩の韻字を順序ごと全部踏襲する次韻は、技量才覚の見せ所とされる反面、制約ゆえの作り易さということもあるわけである」（一九九頁）と著者が言う一面もある。パターンがあるからである。パターンの力は、獄中の筆も紙もない中でも詩詞を作ることが出来るようにさせる。また、その出来上がった詩詞を暗記させやすくさせるから、紙に書いていなくても、出獄後に目の目を見ることにさせたのである。また文革中多くの詩人ならぬ普通の知識分子も旧体詩詞を作った。旧体詩詞の凝縮したパターンの力は、こういう強力な外圧の環境の下でこそ発揮されると言えるのかもしれない。さらには、この本の著者をして「後記」に見られるように、「躍進高潮落伍淵 人歌人哭大旗前」なる七言の対句を作らせた（三〇

八頁)。

如何にも、中国の伝統文化とのあらい・葛藤が、不遜な言い方が許されるなら、快感となる見本のようではないか。大躍進の時期も文革の時期も、いわゆる労働者階級では、口語の「新詩」は作れても、旧体詩詞は作れなかったのである。敢えて言えば、この本に収録された人の旧体詩詞は良質の中国知識人の精髓であり、それを解き明かしたこの本の著者も良質な知識の持ち主であると言えよう。



## 五 北岡正子著 『魯迅 救亡の夢のゆくえ——悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』

関西大学出版部 平成十八年三月二〇日 二八二—一〇頁

この本は、かつて「文芸運動」を志した周樹人が、作家魯迅となるまでを詳細に跡付けた本である。

清国留学生として日本に来た周樹人（すなわち後の文学者魯迅）が、どこで何を学んでいたのか。こういう基本的な問題の上に立って、当時の独逸語専修学校を突き詰め、その実態を解明していく。この調査と展開の面白さは、一般の推理小説を超えた興奮を呼び起こす。足と汗とで駆けずり回り、予想外の人の親切にもあい、手ズルが次々と伸びていつて事実解明が完成する有り様が、一つの文学研究の型を示している。

この当時の事実を可能な限りで自ら再現するという実証的な方法によって、作者は、魯迅の標榜した「文芸運動」の核心が、奴隷を脱却して新しい価値を体現する「人」の創出にあることを結論付ける。欧米諸外国に侵略される清国の下にいる自分たち留学生が、清国に見切りをつけ革命を標榜し、実践行動を呼びかけあっている時期に、周樹人（魯迅）は、『魔羅詩力説』という文章を書いて、復讐の精神を強調するのであるが、その特徴は、支配民族の内にある獸性を否定し、一方、それと表裏の関係にある被支配民族の内にある奴隷性をも否定することであった。獸性も奴隷性も、人間精神の進化の道に向かって歩み続ける「人」が取る術ではない。こうした内容は、

実に読者の知性を刺激するではないか。

最後に付け加えれば、以上はすでに、学会でもつとに有名な論述であるが、このたびの本の特徴は、「補論 嚴復『天演論』」が添えられていることである。この「補論」は、本全体の三分の一を占める文章であり、未発表のものである。嚴復『天演論』を、元となったハックスレー『進化と倫理』の英語原本から徹底的に調査し、分析した論述は、著者のまた一つの学会への貢献をなす力作であることを強調しておこう。

## 六 阿辻哲次氏の著書三冊

1 阿辻哲次氏から本を貰ったのは、三月の一〇日ぐらいであったろうか。

講談社現代新書一九二八『漢字を楽しむ』（講談社、二〇〇八年二月二〇日、二一八頁、七二〇＋α円）

私はこの不意の贈り物に心から喜んだ。というのも、阿辻氏とは三月一日の「吉田富夫先生退休記念祝賀会」のパーティーで久しぶりに会い、同じテーブルの隣同士の席で楽しくひと時を過ごしたからであった。NHKをはじめいろいろなメディアで活躍している阿辻氏に、私はいきなり「おや、痩せたではないか。このごろあんまりテレビで見ないなあ」などと不躰なことを言ったりしたのだが、彼は「少しおとなしくしているんだ」と受け流していた。そして、ご自分のお子さん（娘さん？）が「もう大学受験だと威張ったら、吉田さんに俺の方など孫が受験だと言われた」などと愉快に話したのだった。このときのしばらくぶりの出会いはなんとなく実に愉快なもので、いつまでも心に残ったから、彼から本を貰って、彼も同じように愉快に感じていたのかと思ひ、うれしかった。

私とは十歳も年が違い、次の世代の優秀な一群の学者世代の一人である彼とは、そんなに多くの付き合いはない。昔、彼は三週間ほど中国に滞在し（それも、珍しい稀有な出来事であったのだが）、そのときに北京で銭湯に入って、今は亡き李芒先生を驚かせたものであった。ことほどさように、彼は好奇心に富み、すぐ実行する庶民的な男であ

った。

『漢字を楽しむ』は、まさに彼のその庶民的な知的好奇心をもとに、「おしゃべり阿辻」と学生時代言われた、そのおしゃべりで、読む者を引き付ける。時には脱線する話の面白さに引きずられながら、意外な深奥にいつの間にか入ってゆく。これがこの本の魅力であり、面白いところだ。該博な知識が研究に裏付けられていることを知って、思わず感嘆し、「おぬし、並みのものではないナ」と呻かざるを得ない。そして、彼は、漢字は杓子定規に規定された一点一面もゆるがせにできぬ押し付けの規範的なものではなく、おおらかで自由でさえある庶民の積み重ねによって普遍化したものであると主張している。

「第二章 漢字を書く」の「2 時代ごとの漢字の規範」を読めば、「環」の字の下が「ハネル」か「トメル」かで、大騒動の起こっている漢字の書き取りについて、先に彼は「金文」から「小篆」、王羲之の書まで引用して、丁寧な字というものの変遷を説明するが、現代の高校生や中学生にわかりやすくするために、昭和二四（一九四九）年の「当用漢字字体表」を持ち出して、その区別が印刷の一形態に過ぎないことを証明する。そして、彼は恩師である「小川環樹」先生の自筆を紹介している（二二二頁）。この章は、そもそもが長野県梓川高等学校放送部が制作した「漢字テストのふしぎ」というビデオを見て書かれたものであるが、その問題と恩師との関連をつける作者・阿辻先生の暖かい配慮を私は感じた。

一見すると、ガムシヤラナ文字探索に見えるこの本は、庶民的な感覚の鋭さと暖かさにあふれた「楽しい」本であった。

2 阿辻哲次著『漢字の相談室』（文春新書702、二〇〇九年六月二〇日、二〇四ページ、七百五十円＋税）が惠投されてきた。

阿辻氏の本は実に面白いから、私は一気に読んでしまった。

この本は、いまや電子辞書や携帯電話、あるいはパソコンなどの普及によって、難しい漢字、たとえば「鬱」だとか「蕃薇」など、字を知らなくても書けるようになった現代に生きる、漢字学者の生き残り戦の本である。

だから、例によっていささかどぎつい話題やハツとする疑問が十二個提出される。曰く「屁という字にはなぜ比という音符がついているのですか？」とか「いまから新しい漢字を作るとは可能ですか？」など。そして、それらを、仮説を含めて解説し解き明かす妙手に、思わず感心させられるのである。

私には「しんじょうの点の数」が中でも面白く意義があり参考になった。「一点しんじょう」が「当用漢字字体表」で昭和二四（一九四九）年に初めて表舞台に出たことから始まり、「当用漢字別表」（＝教育漢字）によって、定着して、「二点しんじょう」が間違いであるという風潮になったことを説明する。そこへ、平成一二（二〇〇〇）年に「表外漢字字体表」が出て、すべて「二点しんじょう」（二十七字）になった。ところが、新聞社などの陳情により、今まで使用してきた「一点しんじょう」も「二点しんじょう」に改める必要はない事になった。それが、紆余曲折を経て、IT機器でも、最も新しいJIS規格である「JIS213: 2004」では、「表外漢字字体」の印刷標準字体に準拠した字体になったと言う。

こういう錯綜した経緯は、本文を読んだ方がずっと説得力があつて納得いくが、私にはそれよりも、著者である阿辻氏が「いまは活字の時代ではない。」と強く言い切っている思考が面白く感心したのである。

十二章ある問題のいちいちが愉快であるが、私には「あとがき」がまた見事であつて、感心した。阿辻氏はこう

言う。

「本書に取りあげなかった事柄も含めて、「漢字をめぐる質問」をいくつか列挙してみた。いずれも教室において、あるいは電子メールによって、私がい実際に受けた質問である。これらの質問に対する正解は、国語辞典や漢和辞典のどこを繰っても出てこず、答えは過去の日本と中国における広範な漢字文化史を分析するという作業を通じてしか見いだせないのである。」

この本は、ゆるぎない阿辻氏の見事な漢字文化の語りであった。いままでは空梅雨であった。これからしばらく梅雨の日が続くと言う。そんな時の格好の本であろう。

3 阿辻哲次著『漢字逍遙』（角川ONEテーマ21 B138、二〇一〇年一月一〇日、二二三頁、七二四+α円）

この阿辻先生の本は、なんでも『東京新聞』に二〇〇六年から二年間にわたって連載されたものを一冊にまとめたものと言う。頂いた時、著者から「小著献上 売れますように」と書いた瀟洒な紙が入っていたので、フムフムと思っていたが、なくんだもうすでに売れていたのだと思った。しかし、「あとがき」を読むと、連載が『東京新聞』だから、関西や東北地域では、こんな面白い話は読めなかったので、「首都圏の新聞にだけに書き、関西の新聞に書かないのは不公平だし、地方に対する差別です。」という「苦情」まであったそうだ。そこで、この本が出たとわかって、阿辻人氣の凄さに感心した。

人気があると言うことは、面白いからである。阿辻先生の瀟洒なセンスが行き届いていて、そして、なるほどと思わせる知の裏付けがあるからだ。漢字に対する所謂常識とは違った、成り立ちからの説明は、自分の知識が覆えさせられて、新たな知見を知るゆえに面白い。フーン、そうだったのか、というわけだ。

尤も私はいつも、文字のこういう説明に全幅の信頼を寄せているわけではない。随分眉唾なものもあるからで、それは古代と現代とを無理に結びつけることからくることにも原因があるような気がする。

阿辻先生の今回の本は、そういう謎解きのような体裁を取ってはいない。漢字にまつわるエピソードが主であると言つていいだろう。エッセイなのである。だから、今回は阿辻先生自身のセンスと才が見られるわけだ。穏健な良質の知識人としての阿辻先生が、こういう軽快な文章に、却つてあからさまに出てくるといつてもよい。

二年間の九十九篇と一〇〇にするために追加した「彬」をつうじて、「教育にいい漢字のお話」NIEことばが語られる。NIEとは、「学校などで新聞を教材として学習する運動」であるそうだ(二一〇頁)。だから著者は結構色っぽいことが多かったことを恥じているが、思わぬ漢字から、たとえば「黄」(二二〇―二三頁)からポルノが出てくるのは、現在のような男女関係の乱れた社会情勢からして、大いに語るべきで、恥じる必要のないことであると思う。

追加された「彬」(二〇六―二〇七頁)にしても、まず『論語』の「文質彬彬として然る後に君子なり」を引用して、そこから「宋彬彬」という女の紅衛兵の話になり、彼女がなぜ「宋要武」と改名したかの話になる。最後に著者は、「社会には虚飾に充ちた『文』が氾濫することとなった。昔のお国には『文質彬彬』ということばがありましたね、と誰かが教えてやる必要があるだろう。」と言つて終わる。気の利いた名言と言うべきだろう。

但し、著者のこのような態度は、ある場合物足りなく覚えることがある。たとえば「安」である(二〇八―二〇九頁)。「安」は女性在家中で平穩に暮らしていること、という通常の解釈を述べる。そして、「ある学者の説では」と断つて、「自分の女をたえず家の中に閉じ込めておき、外出させないようにした。」という説を紹介する。

「安」についての、そんな女性の人權を無視した解釈を、私はこれまで一度も見たことがなかった」と阿辻先生は

言い、「すべての女性は、男の『愛玩物』となるために生まれてきたわけではない」「個人の自由な意志をとまなつて、人間として行動できる権利と時間が、男女をとわず万人に与えられるべきであることは当然だ」と怒りを込めておっしゃる。

阿辻先生ははつきりと書いていないが、以上の私の紹介からだけでも、「ある学者の説」には反対なのであろう。でも、ど素人としての私には、「ある学者の説」に心を動かされた。阿辻先生が怒っておられるように、現在でも女性の所謂人権などは守られているとは言いがたいではないか。女性がモノと同じ扱いであつたことは日本でもそんなに遠い昔の話ではない。人権意識とそれを実行する態度が私にだつて備わっているかどうかさえ怪しい。確かに「安」は家の中に女がいて安心なのであろうが、どうしてそうなつたのかについては、現在の觀念からだけで説明することが正しいとは限らないような気がする。だから、私は阿辻先生にはつきり「ある学者の説」に対して賛否を言つて欲しかったと思う。

「愛」(一四六〜一四七頁)には、阿辻先生の「義理チョコしかもらえない男のひがみ」からの解釈が述べられているが、こういう実体験からの意見は十分説得力を持つて伝わってくる。著者は最後に、「『愛』とは、過去に根ざしながら未来に向かう優しさ、と言ひ換えることもできるだろう。」と言う。人を愛し優しさを持つ阿辻先生ならではの定義づけであろう。「愛」についてのこんなに美しい定義づけを聞くのは初めての気がした。



## 七 井波律子著『中国の五大小説（上）』

ゴールデンウィークに一冊ぐらいは本を読もうと思った。才子・阿辻先生の次には、才女・井波律子先生から本を頂いた。四月の末のことである。題して『中国の五大小説（上） 三国志演義・西遊記』、岩波新書一一二七で、二〇〇八年四月二八日発行、二九四頁、八六〇＋α円の本である。

『水滸伝』『金瓶梅』『紅樓夢』は下巻になるそうだ。上巻のこの『三国志演義』と『西遊記』の二篇の長編小説の共通点は、民間の芸能である連続講釈、つまり「語り物」を母胎とした「章回体」小説であるということだ。『三国志演義』は最も早く、意識的に講釈氏の語り口調を採用したが、回目に対句表現を用いた。これが、物語を立体的に膨らませ、複合的に展開させることになったと、井波氏は指摘し、中国古典白話長編小説の類を見ない面白さの源泉の一つが「章回体」にあると言う。

このように、この本には長年白話小説や陳寿の『三国志』の研究にかかわってきた学識の蓄積のあるユニークな指摘が随所にあつて、とても面白い。

『三国志演義』で一つだけ特筆すると、劉禅の描き方についての指摘は大変ユニークであった。『演義』に出てくる男たちの「武」を爽快な英雄たちの滅び行く悲劇と紹介しながら、諸葛孔明が命をささげて尽くした蜀の第二代

皇帝・劉禪はあつけなく魏の司馬昭（晋公）に降伏し、捕らえられ、軟禁される。その際のある宴会での情景を井波氏は紹介しているが（一五二頁より）、捕らえられても歌舞音曲で歓待された劉禪は、とても楽しいから故国・蜀など思い出しはしないと笑う場面だった。

井波氏は次のように指摘している。

「降伏した相手の前に引き出されてニコニコ笑っている劉禪の能天気ぶりは、三国すべてが滅び去る、本来は悲劇的なはずの演義世界の幕切れに、一種、あつけらんとした喜劇的な雰囲気をもたらしています。劉備も関羽も張飛も趙雲も、そしてもちろん諸葛亮も、誰もが死にも狂いで戦ったあげく、ようやく獲得した根拠地蜀。その蜀が滅亡したというのに、劉禪は何の痛痒も感じず、ただ機嫌よく笑い、「この地（洛陽）は楽しいので、蜀のこととは思いません」と、けろりとしているだけ。これは、予想される涙の結末に、明らかに肩透かしを食らわされています。こんなふう終わる長篇小説というのは、おそらく世界に類がないといつてよいでしょう。ここには、幾度となく王朝の興亡を経験した長い歴史をもつ中国で生まれた物語ならではの、開き直った明るい達観があります。劉禪自身は本当に暗愚なだけだったのかもしれないませんが、その笑いを最後に配したところに、一治一乱、統一と分裂、誕生と滅亡を際限もなく繰り返す中国の歴史を詠嘆することなく、しっかりと見据えている『演義』の作者の透徹した視線がみてとれます。」（一七一頁）

これは、『演義』について語った秀逸な視点であろう。

『西遊記』についても同じように、鋭い指摘がいろいろあるが、「四 転生、変化、よみがえり——従者一行、勢揃い」（二二二頁より）は、なかでもユニークであった。

「転生」にまつわる因縁話は『西遊記』に数多く見られます。登場するキャラクターのほとんどが転生を經てい

るといっても過言ではなく、物語の最後になると、三蔵一行は全員さらに転生して仏になります。この意味で『西遊記』は転生にはじまり転生に終わる物語だといってよいでしょう。」(二一九頁)

そして、次のようにも言う。

「転生だけでなく、「変化(へんげ)」の話も頻出します。悟空が術をつかっさままなものに姿を変えるのは妖怪退治の常套手段ですが、ことに仙丹(冒頭引用Ⅱ第一七回・引用者)や水瓜(第六六回)などの食べ物、あるいは小さな蚊(第二二回)やハエに化けて、妖怪の口から体内に入り込んだり、密閉された部屋や箱のなかに隙間から侵入したりして、内部で大暴れするという、「内部攪乱」のモチーフがめだちます。どの場合も悟空はけっきょくまた外部世界へ出てきて、もとの姿に戻ります。こうして悟空はいったん閉ざされた狭い空間に封じ込められたうえで、また現実に回帰するのです。これは、釈迦によって五行山の下に封じ込められた悟空が、三蔵の従者となつて現世に復帰したかたちをなぞつた動きであり、あるいはまた、死と再生の象徴だともいえるでしょう。これは太宗の地獄めぐりのところでふれた、西遊記世界全体をつらぬく転生譚、還魂譚のパターンともつながるものです。」(二二〇頁)

私は『西遊記』を面白い話と思うが、それは次々に出てくる妖怪を孫悟空がやつつけるからである。こうして旅を続け、次にはどんな困難が待っているのか、そしてそれを孫悟空がどうやってやつつけるのかという単純なパターンには安心して読める楽しさがある。

現に、井波氏は次のように指摘する。

「よみがえりの約束のある、予定調和の物語であるために、『西遊記』の読者は何があつても主要キャラクターは絶対に死なないという安心感をもつことができます。そもそも西天取経の旅したいが釈迦如来によって仕掛けられ

たインシエーションなので、これがまた西遊記世界に一種、ゲームにも似た遊び感覚をもたらしています。」  
(二二二頁)

私が、井波氏のこの本『中国の五大小説（上） 三国志演義・西遊記』を喜んで読んだ理由のもう一つは、彼女が莫言著、吉田富夫訳『転生夢幻』上下を書評し、そこにこの小説は『西遊記』の世界であると書いていたからである。(二〇〇八年四月六日『毎日新聞』「本書は明らかに転生と変化を主要モチーフとする中国古典小説『西遊記』を下敷きとする」)

私は一読、主人公・西門鬧という名前から『金瓶梅』の主人公・西門慶を連想し、莫言の小説は『金瓶梅』を下敷きにしていると思った。これは浅はかな読み方であったと言えよう。井波氏が自信を持って転生と変化の物語と書いたからには、このような考察があつたというべきであろう。

私は莫言の小説が、『西遊記』を下敷きしているのか、『金瓶梅』を下敷きしているのかの問題については、井波氏の言うとおりでだろうと思つている。しかし、そう言いながら、莫言の小説を読んだ感じから言うと、転生の面白さはそんなに感じなかった。あるいは変化の面白さはそんなに感じなかった。とりわけ、ブタになってから犬サルなどの転生には、面白さなどはなくただ荒唐無稽な感じがしただけであつた。むしろ、西門鬧の執念とか怨念が、現世に次々現れ子孫に継続していくことよつて、個人的営為の時代と切り結ぶ凄さを感じた。このエネルギーは、西遊記のゲーム感覚よりも、『金瓶梅』の西門慶が負つていた商人階層の勃興するエネルギーに似ているように感じたのであつた。

ぜひとも井波先生の下巻が読みたいものである。

## 八 爽快な本——『コロロギと革命の中国』

竹内実著『コロロギと革命の中国』（PHP新書、二〇〇八年一月二十九日、三二二ページ、八〇〇＋α円）  
本の内容は、次のようになっている。

### 序

第一話 ココロギの話

第二話 阿Qと小D・「復讐」の詩

第三話 短刀の話

第四話 秋雨秋風 人を愁殺す

第五話 家系、軍閥、そして「見る」こと

第六話 ふたたびコロロギの話・山東省のこと

あとがき

竹内先生のこの本は、先生の今までの中国に対する考察の集大成のようなものである。こういうと大げさだが、集大成しようとしたうれしさみたいなものにあふれている。

それは、コオロギの発見によって引き起こされたのである。発見というのも大仰な言い方だが、少なくとも竹内先生にとつては、この発見があつたればこそ、中国、革命の中国が「見え」てきたのである。

ものを書くには、「見え」なくてはならない。資料をそろえ、考察をしても、そこに一本筋の通つたもの、「見える」ことがなければならぬ。「見る」ことも必要だが、それらをひつくるめた「見えた」ということが必要だ。大げさに言えば、世界観が必要なのである。だから、この本は面白く、有意義である。

竹内先生は、コオロギ相撲を見た。そして、互いに何時間も見合つたまま進展しない状態を見て、あることを連想する。それは魯迅が描いた『阿Q正伝』の中の阿Qと小Dが互いに辮髪を握つたままぐるぐる回る場面である。

この不思議な場面の持つ意義を、コオロギから竹内先生はハッと気づき、そして、革命にまで連想を広げる。一向に進展しないように見える、同じところをぐるぐる回っているだけに見えるこの場面こそ、革命中国の姿ではないか。ぐるぐるまわりは、中国革命が理念によつてあつという間に形成されたものではないことを示していよう。革命を起こした毛沢東の持久戦の、実践の姿が目の当たりに浮かび上がる。「黄洋界上 砲声 たかし」と毛沢東の詞に詠われた井冈山の戦いに使われた大砲の、その小さく貧弱な「砲」に、打ちのめされる（一五〇—一八頁）。おどろおどろしい革命がなされたわけではない。等身大の持てる力による革命がなされたのである。中国革命は、等身大の活動に策略という工夫を凝らした成果であるとする先生の強い意見がここにはある。

先生は自らコオロギを買い飼育する。自分で飼ねばわからぬではないか。これが先生の「見る」ことの特徴である。書籍と実体験とを常に組み合わせて物事を観察する。複雑で多重的な中国人の生き方を自らに引き寄せている。山東に育つた体験がよみがえる。こうしなければ、「見え」なかつたに違いない。

『阿Q正伝』からは多くの人が、阿Qが処刑される際に見た見物人の狼の目に言及する。もちろん先生も言及す

るが、上述の阿Qと小Dの取っ組み合いに、中国の真実の姿を見るのである。ばかばかしく疑問に思える一挙手一投足を、軽々に捨象しない強力な洞察がここにはあるが、ここにはきつと実際に痛みを伴った自己体験が含まれているに違いない。だから、一般の観察者のように「見た」だけではなく、「見えた」のである。「見た」だけでは、自分も野次馬の一人で終わってしまう。「見た」ことの先にある、あるものが「見えた」のである。それを触発したのが、コオロギ相撲であるから、コオロギに先生の内から湧き出る喜びのようなものを感じることができよう。

コオロギの死闘から、復讐に燃える情念を感じることができようかもしれない。コオロギの歯から、短刀をイメージすることができようかもしれない。刃物の持つ異様な冴えは、青白き復讐の念によく映える。短刀が取り持つ魯迅と秋瑾の間に、「現実にはありえないが、文学的にはありえよう」（一九六頁）とするこの洞察は、まさしく単に「見る」ことを越えた「見えた」人でなければ言えないことばであろう。

こうして、先生は「革命なんかしてやるもんか！」（二四二頁）という魯迅に、却って「短刀を相手の皮膚につき刺し、刺しつらぬき、ほとぼしる熱い真紅の血を浴び」（一九六頁）させる。二者択一ではない複雑で多重的な中国をわれわれに見事に開示してくれる。

どの章から読んでも、鋭い洞察と徹底した調査にウーンと感心させられるが、この本からわれわれは、中国に対する新しい知見と、なるほどと言う納得と、爽やかな快感を感じることができるのである。

## 九 映画『孔雀』について

二〇〇七年十月二七日の土曜日に、中日ドラゴンズと日本ハムとの日本シリーズがあつたけれど、夜の八時からNHK・BS2で中国映画『孔雀』を見てしまった。見てみてわかつたのだが、これは以前にも見た映画であつた。多分、DVDで見たのだろう。私には、藍天さんが確か褒めていたような気がして、気になっていたので、思わずまた見てしまったのだ。

面白いことに、先に見たときは確かかなり共感するものを持つたはずの、この第五回ベルリン映画祭で銀熊賞を取つた『孔雀』という映画が、実にわからず、つまらなかつた。

兄弟三人の情情的に鬱屈した気持ちと、両親の屈折した心情とが、まるで私には響いてこなかつた。時代背景は七〇年代後半のようなことを言っていたが、文革が少しも出てこないし、文革の影もなかつたのが、不満だつた。ただ、三人の兄弟をめぐる社会とか環境が、実に荒んだものに思えたことが、当時の中国を表現していたのかもしれない。酷薄たる社会という感じがした。個人の人権も福利厚生もない中国の社会で、生きていくのは実に厳しい。

今回、先に気付かなかつた長男の結婚相手の娘が、有意義であつた。母親が苦勞して愛を注いで育て、結婚させ



ようにする息子の嫁になる筈の娘に、親との別居を条件に出される。そして、屋台の開店資金も要求される。このようにしてやっと知能が遅れた息子の結婚が成就されるといふ事柄も酷薄であったが、その時の娘の言う言葉が、「都市の戸籍をもらえて嬉しいが……」とあった。農村戸籍と都市の戸籍を移動させないことで建国以来やって来た政府共産党の酷薄さを、この時私は感じた。

監督・顧長衛は、カメラマンとして長らく活躍した者だが、例えば最後の、動物園に孔雀を見に、兄弟三人の家族を次々に出すシーンなどは、あまりうまいとは思えなかった。それにしても、孔雀の羽を広げる様をこんなにやきもきさせて見せたのも珍しい。羽を広げて、こちらに真正面に向くまでの時間の長かったことが、却って孔雀のオスの逞しさと堂々たる姿を感じさせ、立派だと思わせた。

なぜ、孔雀という題なのかわからなかったが、藍天さんの解説がすべての疑問を解いてくれる。彼女の「中国映画散策」No.6は『天涼』第七巻の二一ページから二六ページに載っている。それによれば、孔雀とは動物園の孔雀のことで、「人間」を象徴しているという。他人が好奇の目を持って別の人を眺める構図が、動物園の孔雀（わたし）と観客（他人）の関係にもあてはまり、孔雀が檻（人生）のなかに閉じ込められて他人に觀賞される構図と同じである、という。

## 十 ラスト・コーション

李安監督の『ラスト・コーション』を観た。といっても、映画館ではなく、DVDで観たのだ。このDVDは、早くから上海小姐さんから貰っていた。でも、原作が張愛玲の「色、戒」なものだから、「ひょん」さんと観に行こうと、これも早くから約束していた。ところがどういいうわけか約束した日になると邪魔が入り、二人の都合がつかなかった。それで、とうとう二人で観ることは諦め、私はDVDを観たというわけだ。聞くところによると、「ひょん」さんは難波の映画館で偶然にも同じ日に観たそうだ。

梁朝偉（トニー・レオン [Tony Leung]）と湯唯の絡みが問題となった映画で、湯唯扮する王佳芝を好きでありながら目的のために自分の欲望を抑える好青年が王力宏だ。王と湯との淡い愛情はよくわかったが、策略としてトニーに接した湯がどうして抜き差しならぬ情にまで発展したのか、よくわからなかった。トニーに年取った影を見た私は、こういう愛情では変則的な関係が却って互いをひきつけるものかもしれないからトニーが湯唯（王佳芝）に強く引きつけられたのかもしれないと思ったが、どうもそういうことが理由ではないように作られている。

四〇年代後期の汪精衛政権下の特務（スパイ）の頭目という人物をトニーはうまく演じたのだが、少し貫禄がなかった。彼のおどおどしたような、疑わしそうな目がうってつけでありながら、両刃の刃になった。最後の宝石店

での湯の感情と「走吧 zou ba」というせりふは意外でありながら、よくわかった。『非情城市』で見せた、何かボーっとしたような男が、湯の言葉にはすばやい身のこなしに反射的に変わって、この場を逃げおさせた。しかし、すべてに疑いを持つ男のトニーは、もう部下にもなめられる弱い男になってしまっていた。

トニー・レオンって良い男なんだろうか、女の人に聞いてみたい。

湯唯は時には綺麗な面を見せるが、好みではない。チャイナドレスがよく似合う綺麗な肢体であった。

王力宏はなかなか良い男だと思ったが、こういう男を好きになる年では、私はない。陳沖が出ていて、懐かしかった。トニーの奥さん役なのだがもう少し活躍場面を作ってやればよいのと思った。彼女はなかなかボリウムのある良い女になっていた。

そのほかにも、背景となる四〇年代の上海の町並みなどが巧みに作られていて、当時の時代が感じられた。

でも、私には何の感動もなかった。一つの過ぎし時代の説明みたいなものにはか思えなかったのだ。李安は、当時すなわち抗日戦がテーマではなく、男女のロマンスがテーマだと力説していたが、本当にそうだろうかと思った。

### 台湾版

寒雁さんからやつと台湾版のDVD『色、戒』を借りて、昨日見た。まったく驚きであった。先に見た大陸版DVDの『ラスト・コーション』とはまるで別物のように思えた。面白かった。確かにこれは男と女のラブロマンスかもしれない。

それは、二人のセックスシーンが省略されていなかったことから来る。激しいシーンで、なるほどこれは成人用映画であると思えるが、私にはこのシーンがなければ、ちっとも『ラスト・コーション』ではないという気がする。

そもそも英語に弱い私は「ラスト」はlastだと思っていて、最後の忠告なのだろうと思い、「走吧 zou ba」と言うのがそれを示しているのだと思っていた。

実は、lastであって、まさに「色」なのであった。

大陸版は、端々のせりふやシーンのカットによって、この映画を愛国、抗日の色濃い映画に改変し、きわめてつまらない凡庸な映画に仕上がっていた。だから、なんでトニー・レオン扮する易先生が、湯唯扮する麦婦人（実は王佳芝という劇団員）に特別な感情を持ったかがわからなかったのだ。しかし、李安監督はちゃんと描いていたのだ。

だが、それがセックスシーンであったために、大陸版ではカットされてしまっていたのだ。

確かにセックスシーンは扇情的で、そういう個人的な秘め事をわざわざ描くことはないように見える。しかし、私はこの台湾版を見て、セックスがこんなにも愛情において重要な位置を占めることを描いた作品は見たことがないと思ったし、そのシーンは実は私には哀切極まりないものであったが、美しいシーンでもあった。特務（スパイ）という隠微な仕事をする、年齢の影が忍び寄る易先生と、使命を帯びて敢えて肉体関係に及ぶ若い麦婦人（というより王佳芝）のつかの間の逢瀬は、どうしても激しい燃え上がるものにならざるを得ない。セックスは、いつでもつかの間に過ぎないけれど、だからいつまでも持続してほしいという希求に溢れている。が、こういう希求を二人が同時に持てることは至福の極みといってよからう。

だからこそ、易先生の身に危険が迫っていることを知る王佳芝は、愛する相手に、「快走 kuai zou」と言えたのだ。もちろん低い声で。

張愛玲の原作でも、台湾版でも「快走 kuai zou」であった。このように、踏ん切りをつけなければ、女性とし

ても心が落ち着くまい。こういう態度こそ女性の愛の表現だと私は思う。寒雁さんが言うように、「快走 *Not a No. 1*」は命令形で、大陸版のように「走吧 *Not a No. 1*」なら主語は「我們」になってしまふ。我們（わたしたち）と言っているのに、易先生だけが勝手に職業柄逃げ出すならば、易先生は自分だけ命拾いして麦婦人（王佳芝）を捨てたことになる。こうして、麦婦人（王佳芝）は愛国の女性と形象される、と寒雁さんは言った。なるほどと思い、大陸版の見事な改変に却って感心した。

映画はやはり映画館で観なければなるまい。

なお、寒雁さんの話では、この張愛玲の原作にはモデルらしきものがあつて、その本当の女スパイの名前は「鄭萃如」というのだそうだ。すごい美人で、日本人の母親を持つ日本人と中国人とのハーフだそうだ。また、相手の男も本当は、「丁黙邨」というそうだ。小説では、「易先生」と苗字しか書いていないけれど、映画では、「易黙成」としてなんとなく当時あつたスキヤングルを連想させているそうだ。